

第 73 回日本医学放射線学会総会 印象記

椎葉 真人

Shiiba Masato

第 73 回日本医学放射線学会総会は、平成 26 年 4 月 10 日(木)～13 日(日)の 4 日間、パシフィコ横浜(横浜市)において開催された。岡山大学放射線医学の金澤右教授が大会長をされ、「Face to Faces, Face to Communities, Face to the World 一向きあう、つながる、そして広がる」がメインテーマとして掲げられた。画像や IT 機器に向いてしまいがちな放射線科医の意識を、改めて患者さんを心身ともに治療するという本来の目的を再確認し、メディカルスタッフや他科医師との交流の重要性を理解し、また世界中の放射線科医と交流できるような人材を育成することが重要であるとの主旨であった。

大会期間中は晴天に恵まれ、港を吹く風が非常に心地よく感じられた。3 日目の 4 月 12 日(土)早朝には女子マラソンのオリンピックメダリストである有森裕子さんを迎えて、「チャリティイベント Run&Walk」が開催された。参加された先生方は非常に爽快に走られたことと思う。

日本放射線技術学会総会学術大会(JSRT)、日本医学物理学会学術大会(JSMP)、日本画像医療システム工業会との合同開会式では、首都大学東京管弦楽団による演奏で幕が開け、とても華々しい演奏であった。また、1964 年東京オリンピックで使用されたのと同じというファンファーレの後、各会長が基調講演を行った。その後合同特別講演として、今話題となっている iPS 細胞研究について、京都大学 iPS 細胞研究所の戸口田淳也先生の講演があった。iPS 細胞

の基礎から生成方法、様々な臨床応用、創薬の可能性まで述べられ、技術の高さに驚嘆した。

本大会もスマートフォンやタブレットに対応したアプリケーションが導入され、無料でダウンロードが可能であった。日程表やスケジュール管理のほか、今回からは抄録集に封入されていた閲覧用パスワードを入力し、依頼講演の抄録閲覧も可能となった。会場内ではタブレット端末を持ち歩く参加者が多かった。しかしバッテリーには気をつけていただきたい。朝の時点で充電を 100%にして臨んだ筆者のスマートフォンは夕方前にはほぼ 0%の状態であった。また、今回は会議センター 6F に JCR ラウンジが設けられ、無料のコーヒー、飲料水のサービスのほか、夜にはアルコール飲料が販売されていた。Wi-Fi が利用可能であったが、筆者がのぞいたときには満席で利用できなかった。ランチョンセミナーも盛況であり、早いものでは朝 9 時に発券終了となる講演もあった。目当てのセミナーがあるときには、朝一番でのチケット取得を勧めたい。

さてメインテーマにも記されているように、今回も国際化を意識して抄録や口演スライド、CyPos は全て英語表記であり、海外からの招待講演も多数行われた。日本の先生の発表は英語か日本語が選択できるが、筆者が聴講したセッションでは約半数の演者が英語で発表されていた。国際化という意識の高さが伺える。会場の案内板も英語が併記され、英語表記のみのもの(写真 1)、ITEM では中国語や韓国語の書かれ



写真1 英語表記のみの案内図



写真2 中国語、韓国語が併記された案内図

ているもの(写真2)もあった。また、「How to improve your English」という特別企画が設けられ、Iowa大学の石上康生先生からは英語圏での放射線科日常診療、教育における表現の仕方について、依頼医や研修医とのやりとり等を通じて、講演があった。次に岡山大学脳神経外科の伊達勲先生からは、データを得たら英語で発表し、論文にしようをテーマに、先生自身の英語論文を書くまでのプロセスや、いかにして医局員に論文を書かしているか、10項目に分けて講演されていた。

3日目の午後には特別企画2として、テレビ番組でおなじみの松本志のぶさんを司会に、北村晴男弁護士(金澤大会長の同級生とのこと)を迎え、金澤大会長、神戸大学の杉村和朗教授とともに「行列のできる医療法律相談所」が行われた。放射線診断、治療に関連した4事例に

ついて、時に笑いを交えてトークが展開された。その中で北村弁護士は医療行為について萎縮する必要はなく、不測の事態の際にもカルテの記載をしっかりとるように強調されていた。

今回もパシフィコ横浜展示ホールでは、国際医用画像総合展(ITEM)が開催され、多数の企業がブースを設け、多数の入場者があった。限られた学会期間内で、セッションや講演の合間に多数の企業のブースを見て回るのは、なかなか困難と思われる。メーカーのホームページや、各メーカーの取材速報やレポート、フォトギャラリー等をまとめたサイトもあるので、参考にするのも一手である。主な企業の核医学関連のトピックスをまとめてみた。

- 東芝メディカルシステムズ(株)

平成25年9月に発表され、頭部及び心筋検査での高画質を目指した3検出器型デジタルガンマカメラGCA-9300Rが展示された。

また初日には初の自社製品であるTOF搭載PET/CT、Celesteionが発表された。ボア径がCT部で90cm、PET部で88cmと被検者に優しい構造となっている。

- (株)日立メデイコ/(株)フィリップスエレクトロニクスジャパン

従来機種であるGEMNI TF-Big Boreのほか、(株)フィリップスエレクトロニクスジャパンのブースでは薬事未承認であるが、デジタルPETであるVereos PET/CTが担当者のタブレット端末にて紹介可能であった。感度、定量性が2倍向上し、脳や心臓等、良好な画像が閲覧できた。また、国内導入が決定したIngenuity TF PET/MRが紹介された。

- (株)島津製作所

従来機種であるEminence STRAGEのほか、乳房専用PET装置として薬事申請中であるElmammoが参考展示された。被験者は腹臥位の状態で、乳房を圧迫することなく高分解能の撮像ができるとのことである。

- シーメンス・ジャパン(株)

核医学診断装置としてはSymbia Intevoが紹介され、人体の矢状断模型による展示であり、来場者の注目を集めていた。

PET/CTの展示はなかったが、4日目のランチョンセミナーでは速度可変寝台連続移動型PET/CTであるBiograph mCT Flowの基礎と臨床応用、今後の展望について、慶應義塾大学の村上康二教授による講演があった。

● GEヘルスケア・ジャパン(株)

β アミロイドイメージング市場開拓として、FASTlabによるFlutemetamol合成や、日本メジフィジクス(株)との協力体制を構築し、医薬品としての国内承認申請を目指していることが紹介された。

また、ドーパミントランスポーター・イメージングの線条体ROI解析アプリケーションとして、DaTQUANTが紹介され、視覚的評価とROI解析、再構成時に傾きがあったとしても傾きがない場合と同様の解析が得られる高い再現性が示された。

PET/CTの最新アプリケーションとして、Discovery PET/CT 610や710に搭載可能であるQ.Clearが紹介された。iterationを25まで多くし、ノイズの低減による画質向上とSUV値の定量性精度向上が可能となった。

閉会式ではJRC Festival Orchestraによる演奏が行われた(写真3)。半数が日本放射線腫瘍学会(JASTRO)のメンバーであったとのこと



写真3 JRC Festival Orchestraによる演奏の様子

だが、半数は今回のために診断科の先生が参加されたとのこと。全国各地から集まった先生方であり、忙しい診療、研究の合間に、練習時間は限られていたと思うが、非常に息の合ったすばらしい演奏で閉会式に花を添えていた。

今回も多くの演題や講演、機器展示があり、放射線医療の進歩を実感する大会であったと思う。本総会で得た知見を明日からの診療に少しでも活かせるよう、気持ちを新たにした4日間であった。

(虎の門病院 画像診断センター)

